

演題番号：A8

医原性糖尿病に罹患した猫に認められた皮膚過敏症

○中村有加里¹⁾，浅川 翠²⁾，星 史雄¹⁾，深瀬 徹¹⁾

¹⁾ 岡山理大 ²⁾ どうぶつの総合病院専門医療&救急センター

1. はじめに：人の場合、糖尿病に付随して生ずる様々な皮膚疾患が認められている。一方、犬と猫では、その発生は少なく、人の場合の1/3程度であるといわれているが、細菌性膿皮症や脂漏症、皮膚の菲薄化、脱毛などが知られている。このたび、糖尿病に罹患した猫に皮膚過敏症の発生を認め、若干の検討を試みた。

2. 材料および方法：症例は、4歳の去勢手術実施済みの雄の雑種猫である。2020年6月に皮膚疾患の治療に訪れ、その際の体重は4.9 kgであった。これ以前に、この猫は、免疫介在性貧血との診断のもと、プレドニゾロンとミコフェノール酸モフェチルを9か月間、さらにシクロスポリンをその後半の3か月間にわたって追加的に投与され、この過程で糖尿病を発症していた。この糖尿病に対して、インスリンゲラルギン(遺伝子組換え)を11か月にわたって投与し、寛解を得ている。なお、糖尿病の治療にあたっては、免疫抑制薬の投与は中止し、プレドニゾロンの投与は漸減した。この糖尿病の治療の間に、この猫は皮膚炎を発症したとのことである。本皮膚疾患に関して、症状の観察と病変部に関する皮膚科学的検査を実施し、薬物治療を試みた。

3. 結果：皮膚病変として、顔面と頸部、肩部を中心とする痒痒とそれに対する激しい掻爬行動、左右の耳介基部と右側口角、頸部における丘疹と痂皮形成、脱毛や被毛粗剛がみられた。ただし、皮膚の菲薄化や多飲多尿は認められず、外部寄生虫は検出されなかった。血液学的ならびに血液生学的検査では著変は認められず、ホルモン疾患を疑う検査所見も確認できなかった。皮膚押捺検査では多数の球菌と好中球残渣が観察された。また、病変部の生検では、潰瘍性好酸球性皮膚炎との病理組織学的診断を得た。本例に対して、診断的治療として除去食試験を試み、さらにドキシサイクリン塩酸塩水和物の投与を行ったが、症状の改善は認められなかった。これに対して、プレドニゾロン、次いでシクロスポリンの投与を行ったところ、皮膚症状の消退を得ることができた

4. 考察および結語：本例は、医原性糖尿病にともなって皮膚過敏症を発症したものである。最近、猫アトピー性皮膚症候群が新たに提唱されているが、これにほぼ一致する病態であると考えた。猫の糖尿病に併発ないしは続発する皮膚疾患として、皮膚過敏症またはそれに類する疾患も考慮すべきであろうと思われる。